

千里の鳥・万博の鳥(第94回)「ヒヨドリ幼鳥」(2020年9月)

ヒヨドリは体長28cm、平地～山地の農耕地や市街地など林に広く分布しており、北方や山地の鳥は冬になると平地や温暖な地方に移動する。日本ではどこにもいるので、「何だ、ヒヨドリか」と思われているが、ヒヨドリの世界的な分布を見ると、日本・朝鮮半島など極東の狭い範囲にしか生息しておらず、日本特産種と言える鳥である。

ヒヨドリはウメ・ツバキ・サクラの花の蜜を吸い、コブシ・モクレンの花びらを食べ、チョウ・ガ・トンボ、そしてセミを追いかけて、サクラ・ヤマモモ・エノキ・ムクノキの実をついばむなど、季節ごとに人家の周りにあるものを餌としている。収穫期が近づいたナシやカキなどの果物をつつき、更にキャベツ・ハクサイを畑の野菜の葉を食べることから、嫌われて追われることになる。

このヒヨドリ、大都市の真ん中の住宅地で一年中観察できるが、昔から街なかに常住していたのではなく、夏は山地の樹林で繁殖、冬は平野部の住宅地に下りてきて越冬する漂鳥であった。私が鳥を見始めたのは1980年なので、ヒヨドリの都市への進出経緯を知らなかったが、都市鳥研究者・唐沢孝一氏★によると、東京都心で繁殖し始めたのが1970年頃のこと、東京だけでなく大阪・名古屋など各地で同時進行していて、鳥仲間の話題になったとのことである。

ヒヨドリ都会進出の理由の一つに、もともと何でも食べる雑食性の鳥で、エサ源の幅が広い上、人が与えるパンに来るなど、新しいエサを求めるチャレンジ精神があるため、都市に散在している多様なものを、食物資源として利用し始めたと思われる。

また、第二次大戦で荒廃していた都市が整備され、公園樹・街路樹が増え大きくなったことを、秋～冬の越冬地として利用し知っていたので、営巣できる場所があると判断し、夏も定住したと思われる。

先月報告のモズは草原の鳥のため、木々の成長とともに都市公園での繁殖・子育てをあきらめたが、林の

鳥であるヒヨドリは逆に、木々の成長とともに都市公園に定着したことになる。

有賀氏による今月の鳥はヒヨドリ幼鳥、後ろ向きであるが開けた口から花の蜜を吸う舌が見え、顔周辺の羽が生えそろうていないため、普段は羽に隠れている耳(穴)が、目の後にぼっかりと開いて見える。また次列風切羽の一部が伸び切っていないが、尾羽が伸びており自由に飛べたと思われる。

万博公園で蝉時雨が終わる頃、自分の季節がきたとばかりに「ピーヨ・ピーヨ」と賑やかに鳴き交わしているヒヨドリの中に、この鳥もいると思われる。

**** 写真 ****

種名:ヒヨドリ 幼鳥

撮影日:2020年8月20日

場所:万博公園

撮影:有賀憲介

9月探鳥会も中止

日本野鳥の会大阪支部、そして吹田野鳥の会はコロナ感染予防から、9月も探鳥会を中止する。今月も紙上バードウォッチング、「ヒヨドリ幼鳥」を楽しんでくださるよう。

(参考資料)

唐沢孝一「マンウォッチングする都会の鳥たち」

1987 草思社

